『痛みからの解放』

昨年１０月１９日、私は腰椎々間板ヘルニアの手術を受けた。約１週間のスピード入院とはいえ、患者学をたっぷりと学ぶことができたが、何より約３ヶ月間苦しんだ痛みから解放されたことには、本当にほっとした。

大学病院時代より、２回大きな腰痛を経験していた。２回目は栄光病院（福岡県）時代、ジョギング直後に強い腰痛に見舞われた。この時はその日、夕方から当直を勤めねばならず、痛み止めの座薬を入れながら朝まで何とか救急患者の対応をした。しかし、数日経っても腰痛は悪化するばかりで、歩行も辛くなり、ついにギブアップして２日間仕事を休んだ。休暇以外で仕事を休んだのは初めてであった。今回はいつもと違っていた。

７月、ある日の朝から左足のしびれを自覚するようになった。坐骨神経痛と考えたが、どうせ自然に良くなるだろうと、タカをくくっていた。しかし、症状は悪化の一途を辿り、やがて強い痛みを伴うようになっていた。

９月に入ると歩行するのがかなり厳しくなってきていた。特に朝起きた直後は痛みもピークであり、トイレで座ったり、洗面することも困難となりつつあった。当直明けの日には当直室から部屋まで、長い廊下を歩かなければならなかったが、数メートルごとに休まねばならず、その度に歯をくいしばって痛みに耐えていた。警備員やその他の職員から「大丈夫ですか」と声をかけられるが、返事すら返せない状態であった。このままではいけないことは分かっているものの、なかなか診療を休むわけにはいかなかった。

ちょうどこの時、ホスピスに入院されていたＫさんが坐骨神経痛様の足の痛みに苦しんでいたが、その訴えを聞いていると、つい自分の痛みと重なって考えていた。Ｋさんの訴えに中腰で耳を傾け、「痛み止めを調節して、何とか痛みを緩和しますね。」と声をかけるのだが、病室から廊下に出ると、思わず痛みのために苦しんでいる自分がいる。廊下で、他の患者さまのご家族から「先生、大丈夫ですか？」と温かい声までかけられ、「自分は何してるんだろう…」と情けなくもなった。もう限界に達していた。朝起きてから、少し痛みが和らぎ、家を出るまでに２時間以上もかかるようになっていた。外来診療をしていても、血圧測定の体勢ですら、苦しくなっていた。

１０月１日、職員みんなから強く勧められていたＭＲＩ検査をついに受けた。正直、予測はしていた。しかし、現実として確認してしまうと、何とも言えない暗い気分になった。第５腰椎の下の椎間板ヘルニアであった。大きかった。これは痛いはずだ。すぐに腹をくくった。

仕事のことを考えると、早期に手術に踏み切った方が、早く復帰できると思われた。本当に手術…？やはり夢のような話だった。１週間入院での手術をお願いして、１０月１７日にＴ病院に入院した。入院直後から、さっそく一患者に変身させられていた。レントゲン検査、脊髄造影検査、心電図検査など初日から忙しい一日であった。次はどっちへ行けばいいのだろうか？辺りをきょろきょろ見ながら、検査室を探している、おどおどした自分がいた。

翌日は麻酔科の先生より全身麻酔の説明を受けた。「今は、気管内挿管を救命救急士の方が研修として行わせていただいています。良かったら承諾してください。」と言われた。内心、『ま

じかよー…』と思いつつ、平静を装いながら１つ返事をして、救命救急士の方に「よろしくお願いします」と挨拶していた。２日間は時間もたっぷりとあったため、痛みを堪えつつ、読書にふけった。数冊、何気に持ってきて最初に読んだ本は、自らもがん体験をされた故･河野博臣先生の「幸福な最期」であった。読んでいくと、闘病日記も記されており、手術前日の心境などが綴られていた。自分の心境ともダブり、この本を選んだのはタイムリーであった。

手術前日、恐怖の浣腸を受けた。初体験であった。苦しかった。我慢できずにすぐにトイレへ走り、もがいていた。翌１９日、いよいよ手術。意外と心は落ち着いていたと思う。妻に見送られ、手術室へ入り、気づいたら手術は終わっていた。その日の晩は長く、苦しかった。腰は固定され、安静を強いられているのだが、お腹が張って辛いのだ。ガスが出そうで出ない。便意なのか、ガスなのかも分からない。眠っている時はいいのだが、また目が開くと辛い。ついに我慢しきれず、夜間にナースコールを初めて押した。たった小さなボタンを押すまでに、どれだけ葛藤したことか。ナースコールを押す勇気。『患者さんって、みんな、こんな思いをしているかなあー』と感じながら、看護師さんの手を煩わせていた。

長い長い夜が終わり、朝には尿カテーテルも抜いてもらい、さっそく歩行器で歩行してみた。傷の痛みはあるものの、足の痛みはすっかり良くなっていた。嬉しかった。痛みで苦しんでいた日々を思い出しながら、自然と笑みがこぼれた。

予定通り、１週間で退院し、翌日から職場に復帰した。１週間休んだことをお詫びしながら、まだ息切れのする中、入院患者の回診をした。Ｋさんの足の痛みは、私の留守中もあまり好転していないようであった。『あれだけ辛い痛みであったが、自分は良くなった。良くなると思っていたから頑張れた。でも､彼女は…。』患者さまの気持ちが少しは分かった気でいた。しかし、良くなるかどうかも分からず、病気ともずっと向き合っていかなければならない多くの患者さまに比べると、自分の苦しみは比較にならないものであった。自分の浅はかな気持ちを恥じ、もっと、もっとそんな方たちを精一杯支えていかなければならない、と改めて心に誓った。

痛みに苦しんでいるうちに、いつのまにか夏が終わり、道端の木の葉は最後の役割として、色鮮やかとなり、美しい情景を作り出していた。そんな季節の変化に気づく余裕も無い日々であったが、また１つ、別の気づきを得た。

追補；

このお家の一大事に、札幌から温かいご支援をいただきました。入院している１週間もの間、病院から優秀なホスピス医を派遣して下さった札幌南青洲病院の前野宏院長、そして誠心誠意の診療をしてくださった田巻知宏先生、小林良裕先生には感謝に絶えません。本当にありがとうございました。

（平成 18 年 1 月 28 日　著）